

# 過去分詞形の時制解釈のメカニズム

和田 尚 明

## 1. はじめに

英語の過去分詞形に関する研究の中で、同形が複数の異なる統語環境にまたがって生起するという事実を統一的に分析している論考はあまり多くないように思われる (Cowper (1989), Langacker (1991), 谷口 (2004))。ましてや、体系的な時制理論に基づいて過去分詞形の表す時間関係に対する統一的な説明を行っている分析はほとんどない。<sup>1</sup>

本稿の目的は、Wada (2001) で提案された時制理論に基づいて、動詞の過去分詞形の時制解釈がどのように行われるのか、そのメカニズムを包括的に解明することにある。具体的には、過去分詞形態素 *-en* が表す意味情報の中の時間概念に関する部位は「過去分詞形の出来事時が潜在的基準時よりも先行する」という抽象的 (スキーマティック) な意味構造を表すが、解釈を行う際に、過去分詞形が生じる統語環境の特性によって、「先行性」という値が保持される場合と「同時性」という値に変わる場合があり、その解釈メカニズムを解明していくということになる。<sup>2</sup>

## 2. 説明基盤

### 2.1. 時制構造レベルと時制解釈レベル

Wada (2001) で提案された英語の時制理論は、定形動詞と非定形動詞の時制解釈を統一的かつ体系的に扱うことを主な目的の1つとしている。それゆえ、この時制解釈モデルは、非定形動詞である過去分詞形が定形動詞との関係においてどのような時間値を表すのかという問題を扱うのに適していると言える。

この時制解釈モデルの特徴の1つは、「時制形式自体がもつ抽象的 (スキーマティック) な意味構造を表すレベル」である時制構造レベル (Tense Structure Level) と、「その抽象的な時制情報を基に、時制の場以外の文法分野に

属する意味的・語用論的・統語的要因や特定文脈の特性などの影響を受けることで、時制形式の表す時間（解釈）値が決まっていくプロセス」である時制解釈レベル（Tense Interpretation Level）という2つのレベルを想定している点にある。言うなれば、時制構造レベルは概念的な時間関係を表すレベルであるのに対し、時制解釈レベルは実際の使用場面における具体的な時間関係を計算するレベルである。時制解釈レベルは、いくつかの段階から成る。第1段階は時制形式の選択のための基準点（Base Point）を決める段階で、最終段階は特定の文脈の中でアウトプットとして出てくる最終的な時間値が定まる直前の段階である。その中間にはいくつかの段階があり、最終的な時間値の決定に至るのに必要な計算がなされる。この2つの時制レベルを想定することで、例えば定形動詞の場合、時制形式の選択と時制解釈は各々（関連はしているが）別個のメカニズムとして扱えるという利点がある。この時間値計算の過程を図式化すれば、図1のようになる。

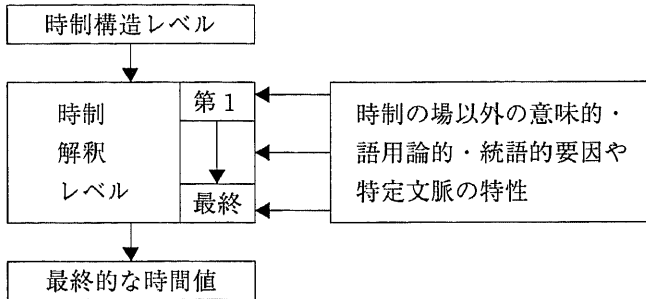


図1：包括的な時制解釈モデル

ここまで述べてきた点をよりよく理解するために、具体例で考えてみよう。

- (1) a. Mary was sick.  
 b. John said that Mary was sick.

(1a, b) の単純過去形 was は同じ時制構造をもつ。過去時制形態素（屈折辞）-ed を伴う時制形式（すなわち、単純過去形）は、「話者の時制視点（Temporal Viewpoint）よりも時間的に前の領域に出来事時が生じる」という時制構

造レベルでの抽象的な意味構造（すなわち、時制構造）をもっている。<sup>3</sup> 話者の時制視点とは、当該時制形式の使用責任者としての話者が時制形式の選択を行う際にとる視点のことである。ここで、話者という概念を Lakoff (1996) や Lakoff & Johnson (1999) の言う「主体-自己 (Subject-Self) モデル」で捉えると、話者の時制視点は、記述や描写の対象となる（客体的側面である）「自己」を構成する一部と言える。特別な事情がない限り、この自己は、あらゆる精神活動の中心である（主体的な側面である）意識主体と同一時空間を占める。<sup>4</sup> 話者の意識（主体）は、その性質上、常に発話時 (Speech Time) に存在する。それゆえ、話者の時制視点は、通例、話者の意識と融合し、その結果、時制形式選択のための基準点（視点）は発話時におかれる。これにより、過去時制形態素の表す「話者の時制視点よりも時間的に前の領域」は過去を指すことになる。

このことを念頭において、(1a) と (1b) の当該過去形の解釈メカニズムを具体的に見ていこう。(1a) ではまず、話者の意識と時制視点の融合が生じ、その結果、過去時制形式 *was* を選択するための基準点は発話時におかれる。これが、時制解釈レベルの第1段階で起こる。次に、出来事時の時間関係（時間値）を測るための基準時 (Time of Orientation) を決める作業に入るが、独立節では候補となる時点は発話時しかないので、発話時が *was* の出来事時 (*was* の表す時間関係) を測るための基準時と解釈される。上で見た単純過去形の時制構造にこれらの情報が加わると、当該の *was* の出来事時は発話時よりも過去時に生じると解釈されるので、この単純過去形は「発話時よりも出来事時が先行する」という時間関係を表すことになる。これが、この文脈で要求されている、最終段階で出てくる時間値である。<sup>5</sup>

続いて (1b) を見てみよう。英語では、基本的に主節・従属節に関係なく話者の意識と時制視点の融合が起こり、その結果、時制形式選択のための基準点は発話時におかれる。それゆえ、*that* 節内の単純過去形 *was* は、主節時ではなく発話時よりも過去にくる時間領域にその出来事時が生じることを示す。ところが、間接話法補部という統語環境においては、出来事時を測るための基準時は独立節の場合と違って2つ考えられる。1つは主節時(元発話時)であり、もう1つは発話時(伝達時)である。主節時基準の場合は、伝達話者は主節時におかれた元話者の観点 (perspective) をとることで主節時を基準時と定め、当該出来事時はそれとの同時性を表すと解釈される。発話時基準の場合は、伝達話者は発話時におかれた自らの観点から出来事時を直接測るため、当該出来

事時は発話時から見た先行性を表すと解釈される。ただし、主節時と当該出来事時との時間関係はどちらの読みの場合でも同時関係になるし、当該出来事時はどちらの場合でも発話時から見た過去時に生じている。<sup>6</sup>これは、時制形式の選択と時制解釈のメカニズムを区別することで生じる帰結の1つである。

## 2.2. 助動詞・本動詞説

ここで先に進む前に、本稿が依拠する時制理論が基にしている重要な仮説として、助動詞・本動詞説について触れておく必要がある。この仮説は Ross (1969), Huddleston (1974), 中右 (1994) などによって提唱・支持されているが、本稿が採用する助動詞・本動詞説はこれらの論考の立場と若干異なる。まず、これらの先行研究では一様に統語範疇としての助動詞 (AUX) を否定しているが、本稿では Akmajian, Steel & Wasow (1979) に従って、統語範疇である AUX と概念的範疇である「助動詞」は別ものと考え、統語範疇 AUX の有無に関わらず、概念的に助動詞と呼ばれる類は語彙動詞と呼ばれる類と同じく「本動詞」という範疇に属すると考える。

さらに、本稿が依拠する助動詞・本動詞説は、明確にプロトタイプ理論に基づいたものであると主張している点で、先行研究とは違う。英語の(法)助動詞は、いわゆる NICE 特性や人称・数に応じた屈折辞の有無などの形態・統語的特徴を鑑み、語彙動詞とは異なる類を成すという考え方が一般には流布している。<sup>7</sup>しかし、この特徴に基づく区分を行うと、be や have は NICE 特性に関しては本動詞用法であっても助動詞に分類されてしまうし、逆に、人称・数に応じた屈折に関しては助動詞用法であっても本動詞に分類されてしまう。<sup>8</sup>

また、法助動詞の中でも need や dare は助動詞と本動詞のどちらにも分類されない混交用法をもつ (例: He needs only go. や By God, if he dares come here again, ...)。一方、法助動詞には本動詞の特徴である定形動詞句の定形位置を占めるという特性もあるし (例: John can play tennis.), 語彙動詞であっても動詞句補部を要求する場合がある (例: Mary began to walk.)。<sup>9</sup> それゆえ、助動詞と語彙動詞は相補分布を成すというよりは、その境界線がはっきりしない同一範疇内の下位集合を形成すると考えるべきである。プロトタイプ理論に立てば、この現象は同じ範疇に属する典型的なメンバーから非典型的な(周辺の)メンバーに至るまでの典型性の度合いの違いがもたらす結果として捉えられる。すなわち、語彙動詞が典型的な本動詞のメンバーであるのに対し、法助動詞は周辺のな本動詞のメンバーで、be と have ならびに need や dare

は語彙動詞と（中心的な）法助動詞の間にくる中間的な領域を占めるメンバーということになる。それゆえ、プロトタイプ理論に基づいた助動詞・本動詞説を採用することで、（法）助動詞と語彙動詞の間にある形態・統語的相違を認めつつも、両者は等しく本動詞という概念範疇に属するメンバーであると主張できるのである。

この仮説の下では、助動詞も本動詞として、語彙動詞と同様、自らの状況を表すことになる。（本稿では、「状況」という用語を、状態・行為・出来事・過程など動詞（述語）によって表される事態のカバータームとして用いる。）助動詞・語彙動詞に関わらず、1つの動詞が1つの状況を表すということは、その状況が当てはまっている（生じる）時間帯である出来事時（Event Time）も、動詞の数だけ存在するということになる。この点を、具体例で確認してみよう。

- (2) a. John has arrived.  
b. Mary may be at home.

(2a) では、「到着する」という状況を過去分詞 *arrived* が表し、その状況が生じた後の結果状態（状況の一種）を完了の助動詞 *has* が表す。そして、それぞれの状況に1つずつ出来事時が対応することになる。<sup>11</sup> (2b) も同様に、*may* の表す「可能性」という状況と *be at home* の表す状況にそれぞれ結びついた出来事時が存在する。

### 3. 過去分詞形の時制構造

では、過去分詞形の表す時間関係が、本稿の時制モデルにおいてどのように計算されていくのを見えていくことにする。まず、われわれの枠組みでは、過去分詞形態素 *-en* 自体が抽象的ではあるが意味をもつと考える。<sup>12</sup> 具体的には、Hirtle (1969: 25) や Langacker (1991) の主張を採用し、過去分詞形態素 *-en* は「任意の出来事が成就 (accomplish) した後の状態にあること」を表すと考える。動詞の一変異形であることを考慮すると、過去分詞形は時間概念と密接に関係していると言えるので、過去分詞形が表す抽象的な意味の中には時間概念に関わる部位があると仮定できる。この部位が、われわれの枠組みでは時制構造レベルにおける過去分詞形の抽象的（スキーマティック）な意味構造に

相当し、その時制構造は以下ようになる。

- (3) 過去分詞形の出来事時は、潜在的基準時よりも先行する。

この抽象的時間構造（すなわち、時制構造）は、過去分詞形態素自体が表す意味概念からの必然的帰結である。ある出来事の結果状態が任意の時点で成立するためには、その出来事自体が時間的に先行して生じる必要があるからである。このレベルでの基準時が「潜在的」なのは、時制解釈レベルにおいてその値が定まることになるからである。(3)を図式化すると、以下ようになる。

時制構造： E ————— (O)

## 図2：過去分詞形の時制構造

なお、本稿に出てくる図式すべてにおいて、Eは出来事時を、Oは基準時を、括弧は潜在性を表す。また、‘X-Y’の関係は「Xが時間的にYより先に生じる」ことを示す。

この時制構造の妥当性を確かめるには具体例でもって例証しなければならないが、過去分詞形が生じる統語環境は受動態・完了形・分詞構文など多岐に渡るため、どの環境に生じる過去分詞形がそれ本来の時制構造を表しているのかという問題をまず解決しなければならない。本稿では、Huddleston & Pullum (2002)がはだか受動態 (bare passive) と呼ぶ構文における過去分詞形が、その時制構造を反映していると考えられる。はだか受動態とは be や get などの助動詞類を主要部にとらない過去分詞構文のことで、(4)がその具体例である。

- (4) a. The guy mauled by our neighbour's dog is in intensive care.  
 b. My house wrecked by a tornado is something I don't ever want to see.  
 c. Their vehicle immobilized by the mud, they had to escape on foot.

(Huddleston & Pullum 2002: 1430)

これらの例では、下線を引かれた過去分詞部分（過去分詞とそれに続く要素）は主要部となる上位動詞 (higher verb) を伴っていない。それゆえ、はだか受動態構文は上位動詞の直接の影響を受けないので、過去分詞本来の時制構造

を反映している環境と言える。

この環境における過去分詞形が、「先行性」という時制構造をもつことを示す根拠がいくつかある。まず、過去時を指す副詞との共起性である。(5) をご覧いただきたい。

- (5) a. I came across a letter written ten years ago.  
 (Huddleston & Pullum 2002: 78)
- b. A top-secret U.S. intelligence report compiled last autumn is now at the center of an internal CIA review to determine whether intelligence services miscalculated the extent of a threat posed by Saddam Hussein's weapons programs.
- c. In a prepared statement issued by the CIA late last week, Tenet denied that the intelligence on Iraq had been bent to satisfy the Bush administration's desire for evidence to support its policies.  
 (b-c: *The Asahi Shinbun*, Friday, June 6, 2003)

(5) の下線部の過去分詞形は過去時を指す時の副詞と共起しているが、これが仮説 (3) を支える根拠であるということは、次のように説明される。はだか受動態は、その統語的特性上、過去分詞形の時制構造そのものが反映する統語環境であった。それゆえ、(5) の下線部では過去時を指す副詞しか過去分詞形の時間値同定に影響を与えていない。これらの時間副詞は直示的過去を指すタイプであり、(3) で述べた過去分詞形の時制構造の中の潜在的基準時を発話時と同定するのに貢献している。それゆえ、過去分詞形の時制構造は、時制解釈において直示的過去時を指す副詞が与える影響、すなわち「潜在的基準時が発話時になる」という部分を取り除いた部分ということになる。したがって、過去分詞形の時制構造自体は「潜在的基準時よりも過去に出来事時が生じる」ということになる。

第2の根拠として、過去分詞形と基準時に至るまでの時間幅を確立する副詞との共起性が挙げられる。具体例として、(6) を見てみよう。

- (6) a. Given the apparatus introduced thus far, we can now describe the semantic difference between such pairs as *father* and *male parent*....  
 (Langacker 1991: 108)

- b. ..., we can observe that the analysis so far presented would be consistent with the claim that, .... (Langacker 1991: 106)

これらの例は、はだか受動態構文の表す状況が潜在的基準時よりも先行する時間幅内に生じることを示す。それゆえ、過去分詞形の時制構造が先行性を表すことの根拠の1つと言える。

同様の根拠として、過去分詞形が基準時よりも先行する時間帯を暗示する副詞と共起する例が挙げられる。(7) をご覧いただきたい。

- (7) a. Answers should not include significant amounts of material already presented in assessed essays. (Google)  
 b. This three days course is conducted in Toppers and develops the skills already introduced in Stage 1. (Google)

これらの例は、はだか受動態構文の表す状況が潜在的基準時よりも時間的に前にくる時間帯のどこかに生じたことを示す。したがって、これらの例は当該環境における過去分詞形の時制構造が先行性であることを裏付けている。

さらに、結果構文の結果句に(純粹)形容詞はなれるのに過去分詞形はなれないという、よく知られている事実が、3つ目の根拠として挙げられる。<sup>12</sup> 具体例として、(8)を見てみよう。

- (8) a. The maid scrubbed the pot {shiny/\*shined}.  
 b. The chef cooked the food {black/\*blackened}.  
 c. The kids laughed themselves {sick/\*sickened}.

(Carrier & Randall 1992: 184)

Carrier & Randall (1992: 184) は、Simpson (1983) や Smith (1983) に従い、このような過去分詞形の選択制限は結果構文と当該過去分詞とのアスペクト的な衝突によるためと述べているが、その衝突の中身が今ひとつはっきりしない。一方、われわれの「過去分詞形の時制構造は潜在的基準時に対する先行関係を表す」という主張は、この制限の中身をはっきりさせることができる。それゆえ、この現象も本稿の主張する過去分詞形の時制構造を支える傍証となる。



以下、この点を順を追って見ていくことにする。一般に、結果構文の結果句は「主動詞によって表される出来事が生じた後の結果状態を明示化する」という構文的役割を担っていると考えられる。見方を変えれば、結果構文を構成する2つの述語のうち、主動詞は結果状態の前の段階に生じる出来事を表す役割を担っているので、もう一方の述語である結果句は結果状態が当てはまっている時間のみにしか言及できない。<sup>13</sup> Bolinger (1967)によれば、名詞句の後にくる英語の(純粋)形容詞はそれ自体が時制構造をもつというよりは他の方法で確立された時点における一時的状態を表すと言う。この特徴をもつ(純粋)形容詞が結果構文という構文に生じた場合、それが表す状況は主動詞が確立する時間構造の中に組み込まれ、主動詞の出来事が生じた後の結果状態が当てはまっている時間帯を指し示すことになる。上で見た結果構文自体のもつ特性として、結果句(の位置にくる形容詞)が主動詞の出来事の生じた後の結果状態を描写することになっているためである。これを結果構文の結果句に関する制約と呼ぶことにする。これに対して、過去分詞形は自らの時間構造を構築でき、「先行性」という時間関係を表す。したがって、結果構文の結果句はある出来事が生じた後の状態が当てはまっている時間帯のみを指さなければいけないのに、過去分詞形は、その先行性の特徴ゆえ、その結果状態の前段階の出来事が生じる時間帯に言及することになってしまうので、両者の間に時間的ずれが生じることになる。これが, Carrier & Randall (1992)の言うところの aspekto の意味的な衝突の中身である。

一見すると、過去分詞形の時制構造(3)に対する反例に思える例がある。例えば、上で見た(4)の下線部の過去分詞は潜在的基準時(この場合、主節時と同定されることになる)よりも時間的に先行する状況ではなく、それと同時に当てはまっている結果状態を表しているので、(3)に対する反例であるという具合にである。しかし、これらの例で結果状態が基準時において当てはまっているというのは、あくまでも語用論的含意である。すなわち、任意の基準時以前に任意の状況が生じた場合、文脈からその結果状態が当該基準時においても当てはまっているか否かを判断することになる。例えば(4b)では、過去分詞形 *wrecked* が表す「竜巻による破壊」という出来事は基準時である主節動詞 *is* の表す時点よりも過去に生じているが、その結果状態である「家が壊れている」状態が基準時において当てはまっていると解釈できるのは、主節の述部の内容のためである (cf. Hirtle 1967: 24)。それゆえ、(9)で示されるように、文脈によっては過去分詞形の表す状況の結果状態が基準時(この場合、

現在時)に当てはまらないこともある。

- (9) a. The house wrecked by the tornado is repaired now.  
 b. The boy mauled by our dog has recovered now.

この場合、過去分詞形は基準時よりも時間的に先行する状況のみを記述していることになる。

(10) も、(3) に対する反例に思えるかもしれない。

- (10) a. He saw Kim mauled by our neighbour's dog.  
 (Huddleston & Pullum 2002: 1430)  
 b. The rebels feel themselves betrayed by the rest of the world.  
 (Declerck 1991: 460)

これらの例は、過去分詞形が表す状況の結果状態が基準時となる知覚動詞（主動詞）の表す時点において当てはまっているという解釈を必ず受けるので、語用論的含意による説明はできないと思われるからである。これに関する説明については、5.3.2節で詳しく見ることにする。

#### 4. 過去分詞形の事象構造

前節では、過去分詞形の時制構造が「潜在的基準時に対する先行関係」を表すことを見た。本節では、過去分詞形の時制解釈のプロセスにおいて、その時間値を決定していく際に大きな役割を果たすことになる「事象構造 (Event Structure)」について見ることにする。本稿の言う事象構造とは、Pustejovsky (1991, 1995) において定式化されている「任意の事象・状況の内部構造」のことである。そこでは「状態 (State)」・「過程 (Process)」・「推移 (Transition)」という3種類の事象タイプが認められているが、本稿に直接関係してくるタイプは「推移」である。「推移」とは「ある状態から別の状態への移行」を表すので、その事象構造は継起関係にある2つの状況によって構成されることになる。本稿では、個々の動詞レベルだけでなく動詞の型も事象構造の鋳型をもつと仮定する。すると、前節で見たように、過去分詞形自体のもつ意味が「任意の出来事が成就した後の状態」であることを考慮すると、過去分詞形という動

詞の型がもつ事象構造は「推移」タイプのそれということになる。以上から、過去分詞形の事象構造は以下のようになる。

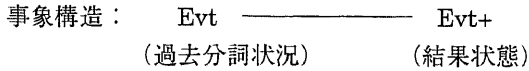


図 3：過去分詞形の事象構造

この事象構造が過去分詞形の時制解釈を行う際に大いに関ってくる。より具体的に言えば、当該過去分詞形が生起する統語環境の特性や文脈の影響を受けることで、事象構造と時制構造のマッピングを行う際に出来事時がカバーする事象構造内の要素が異ってくるのである。以上、過去分詞形の時制解釈を行うための基本的な概念装置を概観したので、次節以降で、過去分詞形が特定の統語環境に生じた場合にどのように時制解釈されていくのかを具体的に見ていくことにする。

## 5. 様々な統語環境に生じる過去分詞形の時制解釈

### 5.1. 名詞の修飾語位置に生じる場合

まず、過去分詞形が名詞句内の修飾語の位置に生じる場合から見ていこう。この場合の統語構造は、概略、以下のように示される。

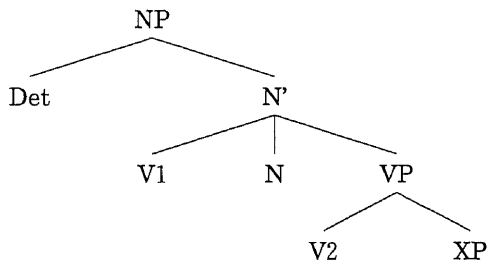


図 4：過去分詞形が名詞句内の修飾語位置に生じる場合

ここで、V1は過去分詞が前置修飾の場合に、V2は過去分詞が後置修飾の場合

に占める位置を表す。XP はそれ以外の修飾語句が占める位置で、V2を含む VP が過去分詞部分である。本稿では、生成文法で言う「下接の条件」において障壁となる NP 節点と S 節点、時制解釈においても一種の障壁になると仮定する。任意の動詞 X と Y の間に時制解釈の障壁が存在すると言うことは、一方が時制解釈に関して他方の制約を受けないということである。それゆえ、この統語環境では過去分詞形の時制構造に主動詞が直接影響を及ぼすことはない。主動詞は、図 4 において、当該過去分詞形を含む NP の外側にくるからである。それゆえ、この環境の過去分詞形は、時制解釈の際の基準時決定に関しては文脈依存的となる（ただし、このことは主動詞依存になる可能性を排除してはいない）。このように、当該過去分詞形を含む NP 内もしくは S 内に統語的に上位の位置にくる動詞（上位動詞）が存在しない統語環境を、（時制解釈における）非束縛（自由）環境と呼ぶことにする。

この点を踏まえて、この環境における過去分詞形の時制解釈のメカニズムを詳しく見ていこう。この統語環境は時制解釈の際に主動詞による制約を受けないので、事象構造と時制構造の間の可能なマッピングによって過去分詞形の時間値が決定されると考えられる。以下順を追って、この 2 つの構造がどのように結びつくのかを見ていく。まず、過去分詞自体の意味が「ある時点における任意の出来事が成就した後の状態」を表すため、事象構造と時制構造を結びつける際に、この「ある時点」が時制構造の中の潜在的基準時（これの特定化は別の要因によってなされる）と解釈される。これにより、過去分詞形の事象構造の中の結果状態 Evt+ が、時制構造の中の（潜在的）基準時に当てはまっていると解釈される。この関係を図式化すれば、以下のようになる。

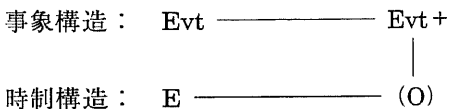


図 5：過去分詞形の事象構造と時制構造のマッピング（基準時）

次に、事象構造の中の要素（過去分詞状況 Evt と結果状態 Evt+）と時制構造の中の出来事時との対応関係が問題となってくる。結論から述べると、(i) 事象構造内の過去分詞状況にのみ出来事時が対応する場合と、(ii) 事象構造内の過去分詞状況だけでなく結果状態に対応する時間帯まで出来事がカバーす

る場合、の2パターンが可能となる。出来事時が事象構造内の結果状態にのみ対応するパターンが存在しないのは、過去分詞形の時制構造からの必然的帰結である。過去分詞形の時制構造は「潜在的基準時から見た先行性」を表し、事象構造内の結果状態がその基準時に当てはまっているので、出来事時はその基準時から見たら過去に生じる事象構造内の過去分詞状況には必ず対応しなければならぬからである。

では、出来事時と事象構造内の要素の対応パターン(i)と(ii)がどのような場合に生じてくるのかを見ていくことにする。今問題となっている統語環境は非束縛環境なので、上位動詞がもつ特性による制約は受けず、文脈や時の副詞類などの影響によって、過去分詞状況に焦点が当てられるのか、基準時において当てはまっている結果状態に焦点が当てられるのかが決まる。<sup>14</sup>例えば、上で見た(5)の例だと、直示的過去を指す時の副詞の存在により事象構造内の過去分詞状況そのものに焦点が当てられていると解釈できるし、以下の例のように、相対的過去時を指す副詞の場合にも同じことが言える。

- (11) a. There is an extended version of all the information presented earlier. (Google)  
 b. The notion of Gain introduced earlier tends to favor attributes that have a large number of values. (Google)

ただ、(11)の場合の基準時は主節時か発話時かであいまいである(ただし、過去分詞が修飾する名詞句は主動詞を中心とした節を形成する要素なので、主節時基準が無標の場合である)。一方、これもすでに見た(4)の例だと、文脈(主節状況)から事象構造内の結果状態に焦点が当てられていると解釈できる。焦点を当てられた部分は際立ち、前景化する。したがって、事象構造において過去分詞状況Evtが前景化する場合は対応パターン(i)となり、事象構造において結果状態Evt+が前景化する場合は対応パターン(ii)となる。念のために言い添えておくと、後者の場合にパターン(ii)のようなマッピングになるのは、出来事時が過去分詞状況だけでなく前景化している結果状態部分もカバーするように拡張したためである。以上から、パターン(i)の場合は出来事時は基準時に対する「先行性」という時間値を、パターン(ii)の場合は出来事時は基準時に対する「同時性」という時間値を表すと解釈される。

それぞれの対応パターンを図式化すると、以下のようになる。事象構造内の

文字囲いしている部分が焦点を当てられている部分で、時制構造内の出来事時がカバーする範囲は四角形（長方形）で表してある。

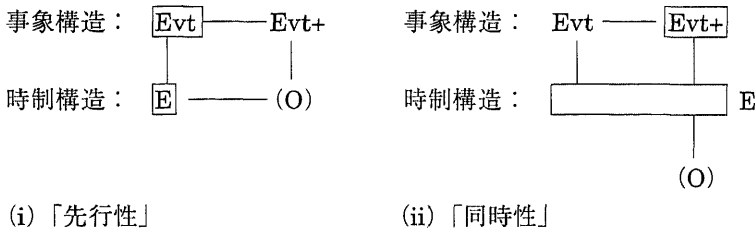


図 6：過去分詞形の事象構造と時制構造のマッピング（出来事時）

どちらの対応パターンが選択されるかは、時制解釈レベルで基準時 O の値が定まった後（定まる際に）、実際に使用される場面で決定されることになる。この点は後で詳しく見ていく。

以上の観察結果から、次のような時制解釈原理が提案できる。

(12) 非束縛環境における時制解釈原理：

非束縛環境における過去分詞形は、時制解釈のプロセスにおいて、過去分詞が表す状況そのものに焦点が当てられると先行性解釈を受け、過去分詞が表す状況の結果状態に焦点が当てられると同時性解釈を受けなければならない。

この原理の妥当性は、以下の考察によって裏付けられる。まず、名詞の前の位置にきて名詞句の一部を構成する過去分詞形から考察することにしよう。

- (13) a. a broken arrow  
 b. an injured player  
 c. a closed museum

(Declerck 1991: 453)

これらの過去分詞形は、原則として受動的な意味をもつ。これ以外に、(14) に見られるように、能動的な意味をもつ過去分詞形もあるが、その場合は自動詞の完了形の解釈が母体となっている場合である。

- (14) a. an escaped prisoner  
 b. a retired minister  
 c. fallen leaves (Declerck 1991: 453)

ここで重要なことは、受動的な意味であれ(13)、能動的な意味であれ(14)、過去分詞形の表す状況自体は、時制解釈のプロセスの中で同定される基準時においてすでに成就しているという点である。具体例で見てみよう。(13a)において、「矢が折れた」時点自体は、基準時と見なされる、この語句が発話された時点よりも時間的に前に生じていると解釈される。(14a)では、「囚人が脱出した」時点自体が基準時以前と解釈される。しかし、このような単語レベルの段階では、実際の使用場面において過去分詞形の表す状況の結果状態が基準時において当てはまっているかどうかは分からない。すなわち、これらの過去分詞形の時間値が「先行性」なのか(上の図6(i))、「同時性」なのか(上の図6(ii))を特定できない。

ところが文レベルになると、前置修飾の過去分詞形が、(15)が示すように基準時との同時性を表すのか(図6(ii))、(16)が示すように基準時から見た先行性を表すのか(図6(i))が、特定文脈から明らかになってくる。

- (15) a. The carpenter suggests parking my car right next to the broken door of the shed. (Google)  
 b. During an injury time-out, the health and safety of the injured player is of primary concern. (Google)
- (16) a. The broken door was repaired and reinforced, .... (Google)  
 b. With rolling subs, when the injured player has recovered he can come back on again in his own time. (Google)

(15)では、文脈上、過去分詞形の表す結果状態が基準時である主節時と同時に当てはまっており、この部分が前景化するので出来事時は結果状態までカバーすることになる。したがって、ここでの過去分詞形は同時性解釈を受ける。一方(16)では、過去分詞形の表す結果状態はもはや基準時において当てはまっていないので、前景化するのは過去分詞の表す状況自体である。それゆえ、出来事時は過去分詞状況にのみ対応し、その結果、先行性解釈を受けるのである。

同様に、名詞の後の位置に生じて名詞句を修飾する過去分詞形も、結果状態が基準時において当てはまっているときに生じる同時性解釈（(4a, b) の例）と、結果状態が基準時において当てはまっていないときに生じる先行性解釈（(9a, b) の例）の両方が可能である。

- (4) a. The guy mauled by our neighbour's dog is in intensive care.  
 b. My house wrecked by a tornado is something I don't ever want to see.
- (9) a. The house wrecked by the tornado is repaired now.  
 b. The boy mauled by our dog has recovered now.

以上から、前置修飾の場合にも後置修飾の場合にも原理 (12) が機能しているということが確かめられたので、これ以降は非束縛環境における過去分詞形の時制解釈がどのようなプロセスを経て得られるのかを、もう少し詳しく全体的に見ていくことにする。具体的には、以下の図 7 が示す全体的見取り図を参照しながら、過去分詞形の時制解釈のプロセスを追っていくことにする。まず、時制構造レベルでは、過去分詞形の表す出来事時は潜在的基準時よりも時間的に前に生じると想定されるのであった（以下の図 7 (i) を参照）。

次に、時制解釈レベルの第 1 段階で、過去分詞形選択のための基準点ならびに過去分詞の出来事時を測るための基準時が決まる。ここで注意されたいのが、われわれの枠組みでは、非定形動詞の場合、時制形式選択の基準点があるまま出来事時を測るための基準時になるという点である (cf. Wada (2001:Ch. 2))。ここでは詳しく論じる余裕はないが、こうなる理由は、概略、以下のとおりである。2.1 節で見たように、過去形などの定形時制形式はその時制構造内に話者の時制視点を含むが、過去分詞形などの非定形時制形式はそのような時制視点を含まない。この話者の時制視点は時制形式選択の基準点決定の要となる概念であり、それを含まない非定形動詞は独立した基準点決定装置をもたない。それゆえ、時制形式選択の基準点は出来事時を測るための基準時と連動するのである。

それでは、基準時同定へと移ろう。この環境では、文脈に応じて主動詞の表す時点（主動詞時点）と発話時のどちらかが基準時となりうるが、ここではとりあえず無標の場合である主動詞時点を基準時と想定する（この環境に生じる過去分詞形は主動詞と同じ節内の要素なので、主動詞と結びつくほうがふつうだからである）。例えば、(4a) の is や (9b) の has の出来事時がそれである。



主動詞時点が基準時になるというここでの主張は、(17) のペアの存在によって裏付けられる。

- (17) a. Cars parked illegally will be removed.  
 b. Cars parked illegally were removed.

(中右 1994 : 223-224)

(17a) の過去分詞形 *parked* は未来のある時点までのどこかで駐車違反を犯している状況を、(17b) の過去分詞形 *parked* は過去のある時点までのどこかで駐車違反を犯している状況を表している。このことは、どちらの場合も当該過去分詞形選択のための基準点がそれを含む名詞句を主語にとる主動詞の出来事時の上におかれ、その時点が過去分詞形の出来事時を測るための基準時にもなっていることを示している。

以上の観察から、この段階の時間図式は、図 7 (ii)①のようになる。ここでは、基準時が主動詞時点になる場合を考えているので、上の図 6 の潜在的基準時が主動詞時点と同定されることになり、後は文脈によって先行性解釈を受けるのか同時性解釈を受けるのかが決まってくる。先行性解釈の場合、事象構造の中の過去分詞状況だけに焦点が当てられ、その部分が前景化するので、事象構造と時制構造のマッピングは図 6 (i) のようになるのであった。したがって、結果的には時制解釈レベルの第 1 段階で得られた先行性の時間図式がそのまま最終段階まで保たれ、その時間値が実際の場面での最終的な値として解釈される (図 7 (ii)②)。

一方、同時性解釈の場合は過去分詞形が表す状況の結果状態に焦点が当てられ、この部分が前景化するのであった。この場合の事象構造と時制構造のマッピングは、図 6 (ii) に示されたものである。したがって、時制解釈レベルの次の段階で、過去分詞形の出来事時が事象構造内の結果状態に対応する時間帯までカバーすると解釈される。この段階で、当該出来事時の内部構造は 2 つの部分、すなわち、過去分詞状況に対応する部分と結果状態に対応する部分から成り立っていることになる (図 7 (ii)③)。上で見た (6) や (7) の例のように「基準時よりも先行する時間帯」を暗示する副詞が存在する場合は、この段階の時間値が最終段階まで保たれ、その値が時制解釈値として得られる。ところが、上で見た (15) の例の場合は、文脈上過去分詞形の事象構造の中の結果状態のみが前景化されているように感じられる (少なくとも、先行する過去分詞

状況は解釈に直接関わってこないように思える)。それゆえ、さらに次の段階で時制構造中の出来事時の内部の結果状態に対応する部分のみが焦点化され、前景化する一方で、過去分詞状況に対応する部分は背景化する(図7(ii)④)。

(15)のような例では、この時間値が当該過去分詞形の最終段階での解釈値となる。同じ「同時性」の解釈でも図7(ii)③と④とは、出来事時の内部で前景化されている部分が異なっているのである。

(i) 時制構造レベル

EP.P. ——— (O)

(ii) 時制解釈レベル

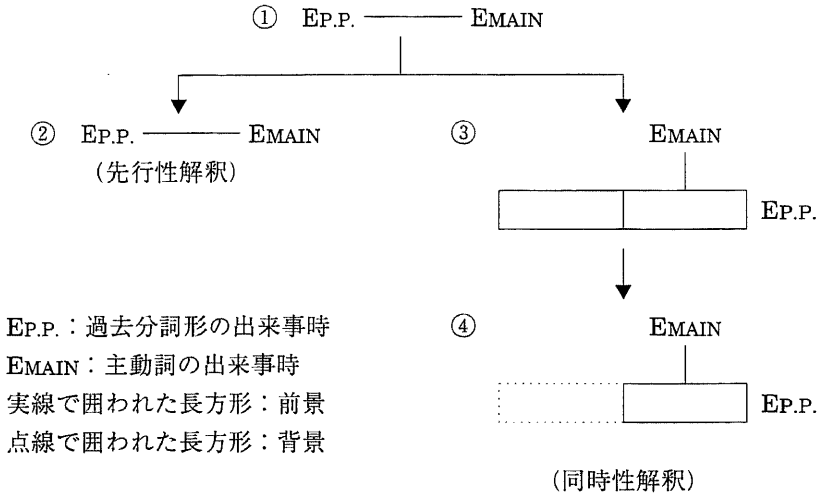


図7: 名詞修飾位置における過去分詞形の時制解釈のメカニズム

以上が、非束縛環境である名詞修飾位置における過去分詞形の時制解釈のメカニズムの全容である。

## 5.2. 同一動詞句内で上位動詞の直接補部として生じる場合

次に、過去分詞部分が同一動詞句内の上位動詞の直接補部位置に生じる場合を見ることにする。ここで言う上位動詞とは、Huddleston & Pullum (2002)

が言う意味での「連鎖動詞 (catenative verb)」のことである。この環境の統語構造は、概略、図 8 に示されるとおりである。

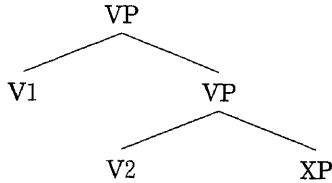


図 8：過去分詞部分が同一動詞句内で上位動詞の直接補部位置に生じる場合

V1には完了形の場合は have, 受動態の場合は be がくる。<sup>15</sup> V2には過去分詞形がきて、V2を含む VP が過去分詞部分となる。この統語環境には V1と V2の間に時制解釈のための障壁が存在しないので、過去分詞形の時制解釈は上位動詞の影響を直接受けることになる。すなわち、上位動詞である完了の have や受身の be のもつ内在的な特性が過去分詞形の時制解釈に制限を加えることになる。したがって、基準時決定についても上位動詞による制限を受け、唯一的上位動詞の出来事時が過去分詞形の出来事時を測るための基準時となる。このように、当該過去分詞形と統語的に上位の位置にくる動詞（上位動詞）の間に時制解釈の障壁となる節点が存在しない統語環境を束縛環境と呼ぶことにする。なお、同一節点（ここでは VP）が直接支配の関係にある場合は、上位の節点のほうがそれを表す範疇の上限となることに注意されたい。

以上から、この束縛環境においては、非束縛環境の時制解釈原理である(12)と違って、以下のような時制解釈原理が発動すると考えられる。

(18) 束縛環境における時制解釈原理：

束縛環境における過去分詞形は、時制解釈のプロセスにおいて、上位動詞のもつ特性に合うような時間関係を表すように解釈されなければならない。

この原理 (18) と完了の have ならびに受身の be のもつ特性の相互作用により、完了形では「先行性」、受動態では「同時性」という時間値が導き出されることになる。以下、この点を詳しく見ていくことにする。

### 5.2.1. 完了形

初めに、完了形の場合から考察していく。<sup>16</sup> われわれの時制モデルは（2.2節で見た意味での）助動詞・本動詞説に基づいているので、完了形は2つの出来事時から成る時制構造をもった意味的ユニット（鑄型）である。過去分詞部分は上位動詞である完了の have の動詞補部の位置を占めているので、両者の間に時制解釈のための障壁はない。したがって、この環境は束縛環境であり、この環境に生じる過去分詞形は上位動詞である完了の have のもつ特性によって、その時制解釈が制限されることになる。

まず、束縛環境の特性から、当該過去分詞形の時制解釈のための基準時は上位動詞である完了の have の出来事時と同定される。次に、事象構造と時制構造のマッピングに移る。われわれの枠組みでは、完了の have は完了形という構文レベルでの「結果状態」を担う要素であり、その中身は過去分詞形の意味内容や動詞のタイプなどに応じて決まってくる（注10を参照）。この上位動詞の have の存在が、過去分詞形の時制解釈パターンを制限することになる。具体的には、この have が事象構造の中の結果状態 Evt+ と結びつき、have の出来事時が結果状態 Evt+ に対応するので、過去分詞形の出来事時がカバーできるのは、事象構造の中の過去分詞状況 Evt が当てはまる時間帯のみということになる。このマッピングを図式化すれば、以下のようになる。

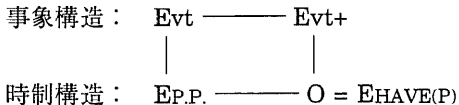


図9：完了形の場合の事象構造と時制構造のマッピング

EHAVE(P)は完了（perfect）の have の出来事時を、E.P.P.は過去分詞（past participle）の出来事時を表す。また図9では、基準時Oと完了の have の出来事時が等号で結ばれているが、これは完了の have の出来事時が過去分詞形の時制構造の中の（潜在的）基準時にとってかわること、その結果、事象構造の中の結果状態 Evt+ に対応していることを示している。なお、（定形の）完了形が独立節に生じる場合、2.1節で見たように、完了の have の出来事時を測るための基準時は発話時となる。

以上の観察から、時制解釈レベルの最終段階での完了形（現在完了形と過去

完了形)の時間値は、以下のように図式化される。‘X, Y’は、XとYが時間的に同時であることを示す。

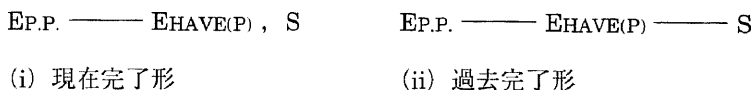


図10：独立節における定形の完了形が表す時間図式

ここまでの論点を、具体例で確認してみよう。

- (19) a. John has arrived.  
 b. John had arrived when Mary left.

完了の have が表す結果状態は (19a) では発話時に、(19b) ではメアリーの出発時に当てはまり、結果状態はともに「ジョンが到着した場所にいる状態」である。この have が過去分詞形の事象構造の中の結果状態と結びついてしまうため、過去分詞形の出来事時が対応する範囲はそれの表す状況、すなわち、「ジョンの到着」そのものだけに制限される。それゆえ、(19)の過去分詞形 arrived の出来事時は、基準時 ((19a) では発話時、(19b) ではメアリーの出発時) に当てはまっている完了の have の出来事時よりも時間的に前にくる解釈 (先行性解釈) を受けることになるのである。結果として、完了の have の出来事時が過去分詞形の出来事時を測るための基準時として働いていることに注意されたい。

ただし、完了形がいわゆる「継続」用法を表すと解釈される場合は、過去分詞形の出来事時が基準時に至る時間にまで当てはまると解釈される。これは、状態タイプという過去分詞形の動詞の特性に鑑み、過去分詞形の出来事時が非有界的に解釈され直すためである。ただし、再解釈により拡張された出来事時の時間幅がカバーする範囲も、完了形全体が表す時間範囲を超えて無限に広がることはできない。それゆえ、過去分詞形の出来事時を測るための基準時である have の出来事時の当てはまっている時点にまでしか拡張できない (Wada 2001: Ch.4)。この拡張の様子を図式化したものが、図11である。

E.P.P.	E.HAVE(P)
--------	-----------

図11：時制解釈レベルにおける完了形の「継続」用法の時間図式

この図と以下の図で、時間図式中の長方形は幅のある出来事時を表す。

具体例で見てみよう。(20) をご覧いただきたい。

- (20) a. You've been under arrest for ten minutes, 'Silky' Bob. (O' Henry, *After Twenty Years*, p.190, In: *The Complete Writings of O. Henry: Volume 2*)
- b. I have known Lodovico for twenty-three years, as long as I have lived in New York. (D. Masello, *My Friend Lodovico*, p.135, In: S. Orlean (ed.), *The Best American Essays 2005*)

例えば、(20a) の場合、過去分詞形の表す「逮捕されている」という状況は状態タイプであり、その結果、過去分詞形の出来事時がカバーする時間帯は拡張的に再解釈される。<sup>17</sup>ただし、完了の have の出来事時がその拡張の限界を設定するので、過去分詞形の出来事時は基準時である have の出来事時にまで拡張されると解釈され、これら2つの出来事時は連続することになる。(20) は現在完了形の例なので、have の出来事時は発話時と同時関係にある。その結果、「継続」用法の現在完了形の時間値は「過去から現在への継続」を表すことになる。

### 5.2.2. 受動態

同一動詞句内で上位動詞の直接補部として過去分詞形が生じるもう1つの場合として、受動態がある。われわれの枠組みでは、受動態も受身の be と過去分詞形の2つの動詞からなる意味的ユニット（鑄型）である。受動態も定義上束縛環境なので、過去分詞部分は上位動詞である受身の be の出来事時を基準時と同定する。また、事象構造と時制構造のマッピングについても、完了形の場合と同様、上位動詞である受身の be の特性によって過去分詞形の出来事時と事象構造の中の要素との対応の仕方が制限されることになる。ただし、その制限のされ方は完了形の場合とは異なる。

では、この環境における過去分詞形の時制解釈のメカニズムを詳しく見てい

くことにしよう。はじめに、受身の *be* がもつ特性について考察する。われわれの枠組みでは、受身の *be* は本質的に *コンピュータの be* と同じであり、*be* の表す時点において主部の指示物または指示内容が補部のそれと等しい関係にあることを示す。<sup>18</sup> 以下、この関係を「主述の等号関係」と呼ぶことにする。まずは、この関係の中身を具体例で確かめてみよう。(21) をご覧いただきたい。

(21) a. John's book is on the desk.

b. Mary was sick.

(21a) では、「John's book の指示対象の存在場所が *on the desk* が指示する場所である」という関係が *be* の出来事時 (EBE) において当てはまっている。(21b) でもやはり、「Mary の指示対象が *sick* の指す状態にある」という関係が *be* の出来事時において当てはまっている (ここでは、「ある状態にある」ことも比喩的に「ある場所にある」と捉えている)。

受動態の場合、上位動詞である受身の *be* が主述の等号関係を満たすためには、過去分詞の表す状況が生起した後の結果状態が *be* の出来事時において当てはまっている必要がある。この理由は、以下に述べるとおりである。基準時において述部である過去分詞が表す状況が真であるためには、その内部構造すべてが実現していなければならない。そのためには基準時においてその結果状態が当てはまっていなければならない。そうでないと時間的なずれが生じてしまい、基準時 (この場合、*be* の出来事時) における主述の等号関係は成立しないからである。以上から、受動態では過去分詞形の事象構造の中の結果状態 *Evt+* に焦点が当てられることになる。それゆえ、過去分詞形が表す出来事時は事象構造の中の結果状態 *Evt+* にも対応することになり (以下の図12①a)、その結果、当該出来事時は基準時以前の時間帯から基準時と同時の時間帯にまで拡張するように解釈されるのである (以下の図12②)。以上のプロセスを経て、最終的には過去分詞形の出来事時は受身の *be* と同時時間帯に当てはまるという時制解釈を受けるのである (以下の図12③)。これが受動態における過去分詞形の時制解釈の典型的なパターンである。

ここまでの論点を、今度は具体例に基づいて見ていこう。まずは、典型的な受動文である、過去分詞形の動詞が状態変化を表すタイプからである。<sup>19</sup> (22) をご覧いただきたい。

(22) a. The letter was written by her secretary.

(Huddleston & Pullum 2002: 77)

b. It was broken deliberately, out of spite.

(Huddleston & Pullum 2002: 79)

(22a) では by 句, (22b) では deliberately という副詞の存在が示すように, (22) の文の状況は制御可能な状況であり, 過去分詞形の動詞は状態変化を表すタイプと言える。これらの過去分詞形の出来事時が基準時にまで拡張される際, 事象構造内の過去分詞が表す状況 ((22a) では「手紙が書かれる」という状況, (22b) では「あるものが壊される」という状況) の当てはまる時間帯そのものが拡張されるのではなく, 事象構造内の結果状態に対応する時間帯を当該過去分詞形の出来事時がカバーする形で拡張される。これにより, 過去分詞形の出来事時のカバーする時間帯が be の出来事時の当てはまる時点 (基準時) にまで達するのである。以下の図12③の長方形の中に実線があるのは, 当該出来事時の内部構造に事象構造の中の過去分詞状況に対応する時間帯と結果状態に対応する時間帯があることを示している。

なお, 受動態の過去分詞形が先行性解釈を表しえないことは, 次の例によって実証される。

(23) \*Yesterday the house was broken the day before. (中右 1994 : 262)

(23) は, 実際の使用場面において, 「家が壊される」という状況の出来事時が基準時よりも時間的に先にくるという解釈を許さないことを示している。これは, 上位動詞 be の特性によって, 過去分詞形の時制解釈が上で見たように「同時性」を表すように制限されるためである。

ここで, 典型的な受動文ではない, 過去分詞形の動詞が状態変化などの「影響性 (affectedness)」を引き起こさない状態タイプの場合は, どのようなプロセスを経て解釈されるのかを見ておく必要がある。この場合, 出来事時の拡張のパターンが異なってくる。(22) のような典型的な受動態は動的 (dynamic) 受動態と呼ばれ, 過去分詞形が状態タイプの静的 (stative) 受動態と区別される。(24) をご覧いただきたい。

(24) a. She was criticized by everyone.



b. She is loved by everyone.

(Huddleston & Pullum 2002: 1438)

(24a) が動的受動態の例で、(24b) が静的受動態の例である。動的受動態の場合と違って静的受動態の場合は、過去分詞形の動詞のタイプが状態であることから、事象構造と時制構造がマッピングする際に出来事時は過去分詞状況 Evt にのみ対応する。状態動詞には状態変化がないため、事象構造の中の結果状態 Evt+ は背景化してしまうからである (以下の図12①b)。しかしながら、この出来事時が受身の be の出来事時において当てはまっていないと主述の等号関係を満たせないのので、ここでは当該状況の状態性の特徴から過去分詞形の出来事時が非有界的に解釈され、それ自体が基準時である受身の be の出来事時と同時にまで拡張する (以下の図12②)。その結果、動的受動態の場合と同様に「同時性」の解釈をもつことになるが、その出来事時の内部構造は過去分詞状況と結果状態に対応する2つの部分に分かれてはいない (以下の図12④)。この出来事時の拡張のメカニズムは、本質的には完了形の「継続」用法の場合と同じである。

最後に、Huddleston & Pullum (2002) が分詞的形容詞 (participial adjective) と呼ぶ過去分詞形を含む受動態について考察する。

(25) a. They were very worried.

b. They were married.

(Huddleston & Pullum 2002: 1436)

(25a) の worried は very によって修飾されているので明らかに分詞的形容詞であるが、(25b) の married は動詞としての過去分詞と分詞的形容詞との間であいまいである。<sup>20</sup> (25b) の married が by 句に伴われる場合は通常受動態であるが、by 句を伴うことができない場合は分詞的形容詞と解釈される。ここでは、後者の場合を想定して話を進めることにする。これらの2種類の-en形 (過去分詞と分詞的形容詞) の性質が異なるということは、両者が異なる意味構造をもつことを意味している。過去分詞のほうはあくまでも動詞であり、分詞的形容詞のほうは形容詞であることから、前者の時間構造には (その動的な性質ゆえ) 状態変化のプロセス (すなわち、過去分詞状況に対応する部分とその状況の終結点) に関する部分も含まれるが、後者の時間構造には (その静

的な性質ゆえ) 状態変化を終えた結果状態に関する部分のみが含まれる。言い換えると、後者の場合では状態変化に対応する部分は背景化されて、直接時制解釈に関わってこなくなる。

分詞的形容詞を含む受動態が、状態変化のプロセスを含まないことを示す経験的証拠として、(26) と (27) が挙げられる。

- (26) a. The cathedral is totally destroyed.  
 b. \*The cathedral is being totally destroyed. (中右 1994 : 376)

- (27) a. \*The town is destroyed house by house.  
 b. The town is being destroyed house by house. (中右 1994 : 376)

中右 (1994 : 376) では、進行形や「名詞 by 名詞」の形をとる表現は、通例、プロセスを表すと述べられている。(26) において totally はあるプロセスの終

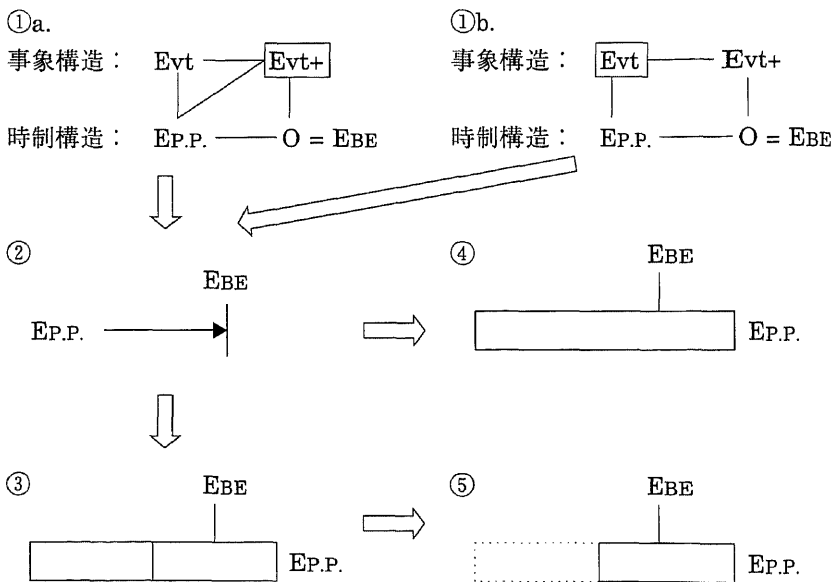


図12：受動態の時制解釈のメカニズム

わたったあとに言及するので、この destroyed は分詞的形容詞と解釈される。したがって、この過去分詞形はプロセスの途中を表す進行形とは共起できない。一方 (27) において、house by house はプロセスの途中に言及するので、この destroyed は状態変化を表す典型的な受動態の過去分詞形である。それゆえ、プロセスを表す進行形と共起可能である。

以上の議論から、分詞的形容詞は動的受動態が表す出来事時の中の焦点化され前景化された「状態変化後の結果状態」に当たる部分のみを表すことになり、その時間図式は図12⑤に示されるとおりである。この図で長方形の中の点線で囲われた部分は背景化した部分であり、実線で囲われた部分が前景部分である。ここでは、前景部分に対応する出来事時の部分のみが、時制解釈において問題となってくることを示している。

このように、動的受動態（典型的な受動態）でも、静的受動態でも、分詞的形容詞でも、時間構造の内部に違いはあるが、EBEとEP.Pの同時性（重複部分があること）は共通している。この「同時性」こそが上位動詞である受身の be の特性が要求する「過去分詞形の表す時間関係」と言え、原理 (18) に合致している。

### 5.3. 同一節内だが、上位動詞の直接補部として生じない場合

今度は、過去分詞形が同一節内にあるが、上位動詞の直接補部位置に生じていない場合を見ていくことにしよう。この統語環境は、以下の樹形図によって表される。

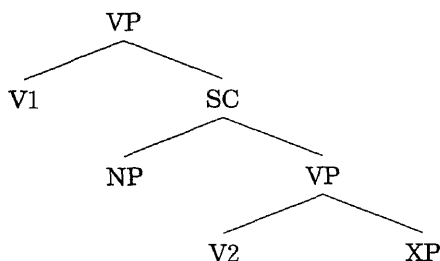


図13：過去分詞形が同一節内の、上位動詞の直接補部位置に生じていない場合

V1には上位動詞、V2には過去分詞形がくる。XPには任意の修飾要素がきて、下位のVPは過去分詞部分に当たる。前節で見た場合と違って、上位動詞の直

接補部は小節 (small clause) であって、過去分詞部分は直接補部位置にないことに注意されたい。ここで言う小節とは、「定形節や to-不定詞節以外で、命題内容をもつ、INFL 要素や連結詞を欠く主語と述語の対」のことである。この環境内の過去分詞形は V1 の直接補部の位置にはないが、V1 と V2 の間に時制解釈の障壁となる節点 NP や S がいないため、この統語環境も束縛環境と言える。それゆえ、5.2 節で提示された束縛環境における時制解釈原理 (18) が発動する。この原理により、この環境内の過去分詞形も時制解釈の際には上位動詞のもつ特性に基づく制限を受けることになる。本節では、上位動詞に使役の have と知覚動詞がくる場合を考察することにする。

### 5.3.1. 使役動詞補部<sup>21</sup>

過去分詞形が使役の have の補部 (補文) の一部を形成する例として、まず以下の例をご覧ください。<sup>22</sup>

(28) a. John had some yew-trees planted in his garden.

(Declerck 1991: 459)

b. She had the house painted. (Huddleston & Pullum 2002: 1245)

c. I had my hair cut short. (Google)

この環境における補部が文ではなく小節であることは、次のような例の存在によって示される。

(29) She had her mother be examined by a specialist.

(Langacker 1995: 6)

(29) において使役の have の補部に連結詞 be が生じているということは、この be を含んだ補部こそが S 節点をもつと考えられるからである。<sup>23</sup> したがって、補部内に連結詞を含まないが主述関係をもつ (28) の補部のほうは SC 節点をもつと言える。

この結果、この統語環境は束縛環境ということになり、(28) の過去分詞形は上位動詞である使役の have の特性によって時制解釈が制限されることになる。Duffley (1992: 70-71) で述べられているように、make 使役構文や have 使役構文は、一般に同時的使役 (concurrent causality) を表す。時間関係の

観点から考えると、補部状況の当てはまる時間帯と使役動詞の表す状況の当てはまる時間帯は同時でなければならないという制約があると言える。以下では、これを「同時性の制約」と呼ぶことにする。この制約の妥当性は、以下のパラダイムによって例証される。

- (30) a. Miriam now ordered Pengally to break down the gate, but he said he really couldn't go that far.  
 b. \*Miriam now had Pengally break down the gate, but he said he really couldn't go that far.

(Duffley 1992: 70)

(30b) が非文なのは、have 使役のもつ同時性の制約から、補部状況はすでに have の出来事時と同時間帯に生じているはずなのに、後半部分でその内容を否定しているので矛盾が生じているためである。

もしこの同時性の制約が上位動詞 have の要求する補部状況に対する一般的な制約であるならば、補部に過去分詞形がくる場合もこの同時性の制約は働くと予測できる。事實は、(31) が示すように予測どおりである。

- (31) a. \*Yesterday the teacher had students play on the ground today.  
 (早瀬 2002 : 208)  
 b. \*At that time I had my watch stolen two hours earlier.

(中右 1994 : 262)

(31b)において、at that time が使役の have の出来事時を、two hours earlier が過去分詞形の出来事時を指定すると解釈されるが、この文が非文なのは2つの出来事時が同時間帯に当てはまると解釈できないからである。以上から、have 使役の補部に原形がくる場合 ((30b) や (31a)) と同様、過去分詞形がくる場合も同時性の制約の影響を受けていることが分かる。

それでは、使役の have の補部に生じる過去分詞形の時制解釈のメカニズムを詳しく見ていくことにする。まず、使役のもつ概念と過去分詞形自体がもつ意味情報が整合的に結びつくためには、使役が発効する時点において過去分詞状況が生じた後の結果状態が当てはまっているように方向づけるしかない。基準時においてすでに生起してしまっている過去分詞状況そのものに使役概念を

向けるのは不可能だからである。この結果、事象構造の中の結果状態が焦点化される。すなわち、上で見た同時性の制約がこの事態を引き起こす原因となっているのである。この同時性の制約を満たすために、この環境における過去分詞形の出来事時は事象構造の中の過去分詞状況 Evt だけでなく、焦点化された結果状態 Evt+をもカバーするように拡張する。また、この環境が束縛環境であることから、時制解釈のための基準時は上位動詞である使役の have の出来事時と同定される。以上から、当該過去分詞形の出来事時が基準時である使役の have の出来事時にも当てはまっていると解釈されるのである。(ここまでのプロセスは、以下の図14①②に示されている。) この過去分詞形の出来事時は、過去分詞状況に対応する部分と結果状態に対応する部分の2つの部分から成る内部構造をもっている(以下の図14③)。

具体例で見てみよう。例えば(28a)では、過去分詞形 planted は上位動詞 had の束縛環境にあるため、have 使役の特徴である同時性の制約によって時制解釈が制限される。すなわち、上で見たプロセスを経て have の出来事時と同時であるという解釈を受ける。ここでは使役の have が過去形で独立節に生じているので、その出来事時は発話時を基準時とした過去に生じる。その結果、過去分詞形の出来事時は使役の have の出来事時と同じ過去にある時点に当てはまると解釈できる。

この環境における過去分詞形の時制解釈のメカニズムを図式化したのが、以下のものである。

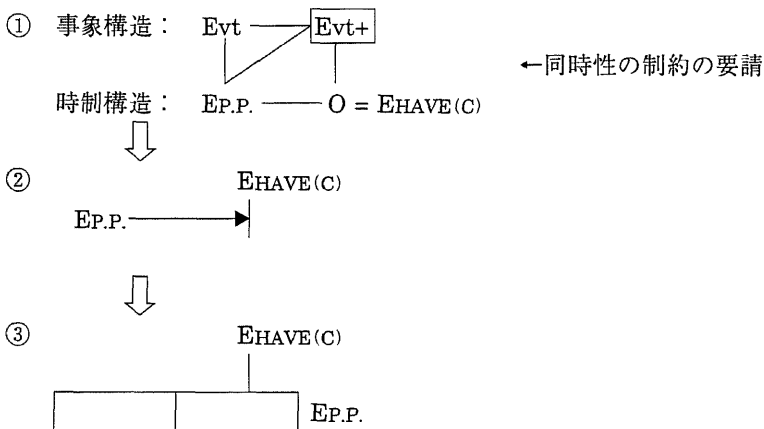


図14：使役動詞 have の補部内に生じる過去分詞形の時制解釈メカニズム

E<sub>HAVE</sub>(C)は、使役 (causative) の have の出来事時を表す。図14③が最終段階の時間図式で、長方形内の実線は出来事時の内部構造が事象構造内の2つの部分に対応する時間帯に分かれていることを示す。この環境内の過去分詞形が過去分詞状況だけでなくその結果状態も含む動詞の一形態でなければならないということは、Baron (1973: 319-320) で述べられている、「have 使役の補部には [-stative] の動詞がくる」という主張によって裏付けられる。

[-stative] は状態変化という概念と合致し、状態変化は動的な時間概念だからである。以上の観察から、使役の have の補部に生じる過去分詞形の時制構造も、原理 (18) に従っていることは明らかである。

### 5.3.2. 知覚動詞補部

知覚動詞補部 (補文) に過去分詞形が生じる場合も、have 使役の場合と同様の時制解釈のメカニズムが働いていると考えられる。まず、具体例として (32) をご覧いただきたい。

- (32) a. He saw Kim mauled by our neighbour's dog. (=10a)  
 b. The rebels feel themselves betrayed by the rest of the world. (=10b)  
 c. I heard the window broken. (Huddleston & Pullum 2002: 1245)

知覚動詞補文は、一般に小節を形成すると言われる (Gee 1976, Kirsner & Thompson 1977, 稲田 1989, Arimoto 1991, Hayashi 1991)。<sup>24</sup> 補文中の述部にくる非定形のタイプ (原形や過去分詞など) に関係なしに SC 節点をもつと言えるのは、この環境に決して連結詞の be が生じないことから明らかである。<sup>25</sup>

- (33) a. \*I saw John be crossing the street.  
 b. \*I saw Kim be mauled by our neighbour's dog.

それゆえ、(32)の補文は小節の定義からも SC 節点をもつとすることができる。

以上の観察から、この環境では過去分詞形と上位動詞の間には時制解釈の障壁が存在しないので、束縛環境ということになる。それゆえ、原理 (18) が発動し、この環境内の過去分詞形は上位動詞である知覚動詞の特性によってその時制解釈に制限が加えられる。知覚動詞補部には、通例、知覚できる対象がく

ののだが、知覚できる対象は原則として知覚する時間と同時に存在しているものでなくてはならない(Kirsner & Thompson 1976, 中右 1980, 高橋 1999)。<sup>26</sup> これを「知覚の同時性の制約」と呼ぶことにしよう。この制約の妥当性は、次の例からも明らかである。

(34) a. \*Helen saw them having been planning their getaway for months.

b. \*Hannah heard the Wilsons going to take a trip to Egypt.

(Kirsner & Thompson 1976: 207)

(34a) は補部に完了形がきているので、知覚する時間よりも補部状況は時間的に先行する。したがって、知覚の同時性の制約に違反し、非文となっている。同様に、(34b) も (be)going to は時間的後続性を表すので非文になると説明できる。

この知覚の同時性の制約のため、知覚動詞補部に生じる過去分詞形の時制解釈のプロセスは、使役の have の補部に生じる場合と基本的に同じになる。まず、知覚の同時性の制約によって、事象構造内の結果状態 Evt+が焦点化される。また、この過去分詞形の出来事時を測るための基準時も、上位動詞である知覚動詞の影響を受ける。その結果、知覚動詞の出来事時が基準時であると解釈される。以上から、基準時である知覚の時点（すなわち、知覚動詞の出来事時）に当てはまっている結果状態をカバーするように過去分詞形の出来事時が拡張されることになる（以下の図15①②）。したがって、この過去分詞形の出来事時の内部構造も過去分詞状況に対応する部分と結果状態に対応する部分をもつ（以下の図15③）。このプロセスは、何かを知覚するためには知覚作用が発動中に知覚対象が存在していなければ（当てはまっていなければ）ならないという認知的に妥当な考え方によっても正当化される。<sup>27</sup>

論点を具体的に考察するために、(32a) を例として見てみよう。知覚の同時性の制約により、上で見たプロセスを経て、過去分詞形 *mauled* の出来事時は「傷を負わず」状況と「傷ついた後」という結果状態に対応する時間帯をカバーすることになる。この結果状態は基準時である *saw* の出来事時に当てはまっているので、過去分詞の出来事時は（部分的にはあるが）*saw* の出来事時と同時間帯を占めることになる。したがって、過去分詞形 *mauled* の表す時間値は「基準時との同時性」ということになる。知覚動詞 *saw* は過去形で



独立節に生じているので、その出来事時はこの場合の基準時である発話時よりも過去に生じる。以上から、過去分詞形 *mauled* の最終的な時間値は「過去時における基準時との同時性」ということになる。

この環境における過去分詞形の時制解釈のメカニズムをまとめると、以下のようになる。

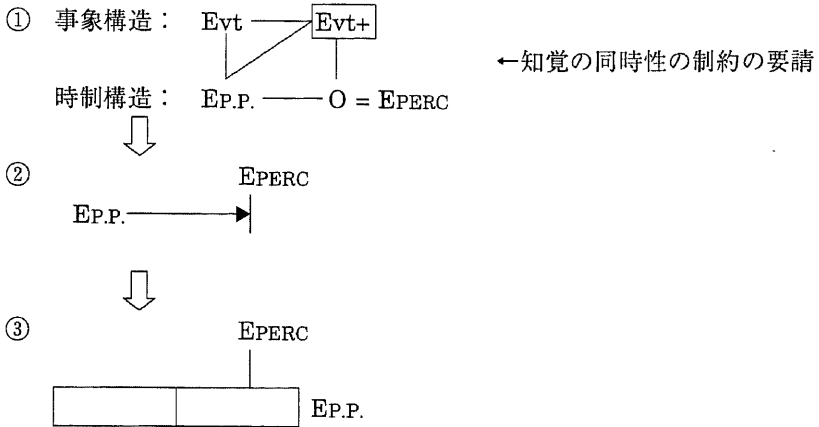


図15：知覚動詞の補部内に生じる過去分詞形の時制解釈メカニズム

EPERCは、知覚動詞 (perception verb) の出来事時を表す。図15③の長方形内の実線は、出来事時内で過去分詞形が表す状況自体とその結果状態に対応する部分を区別している。このような内部構造になるのは、使役の *have* と同様、この環境に生じる過去分詞形が非状態動詞 (状態変化を表す動詞) だからである。以上の議論から、3節で見た知覚動詞補文に生じる過去分詞形が同時性解釈をもつという事実は、過去分詞形自体が「潜在的基準時に対する先行性」を表すという主張と矛盾しないことが明らかになった。

#### 5.4. 異なる節内に過去分詞形が生じる場合：分詞構文

最後に、過去分詞形がいわゆる分詞構文として生じる場合を考察してみよう。<sup>28</sup>

(35) a. Painted white, this house looks bigger. (中右 1994 : 222)

- b. Upset by the news of the revolution, they decided to fly home as soon as possible. (Declerck 1991: 456)
- c. Used economically, one tin will last for at least six weeks. (Swan 1995: 406)
- (36) a. The job finished, we went straight home. (中右 1994 : 222)
- b. The general gone, the soldiers relaxed. (Declerck 1991: 462)
- c. All things considered, we're lucky not to have been sued for a lot more. (Huddleston & Pullum 2002: 1430)

(35) は主語のない分詞構文, (36) は主語つきの分詞構文の例である。前者の場合は、いわゆる意味上の主語が目に見えない形で存在すると仮定できるので、どちらの場合も分詞構文は1つの節と見なされる。したがって、分詞構文を伴う文は以下のような統語構造をもつと仮定できる。

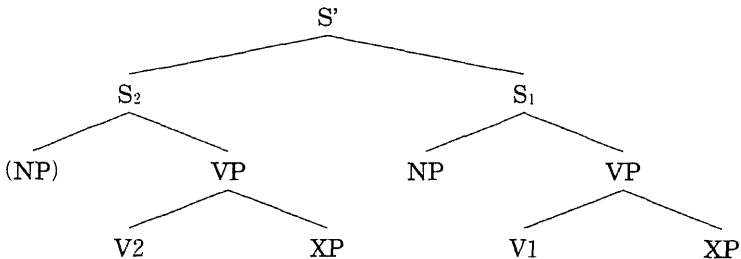


図16：過去分詞形が主節動詞とは異なる節に（分詞構文として）生じる場合

S<sub>1</sub>は主節, S<sub>2</sub>は従属節（分詞構文）を表し, V<sub>1</sub>には主節動詞, V<sub>2</sub>には過去分詞形がくる。XPには修飾要素や補部となる要素がきて, S<sub>2</sub>内のVPは過去分詞部分となる。この図から明らかなように、主節のS節点及時制解釈の障壁になり、過去分詞形を含む従属節内には、それに直接影響を与えることのできる上位動詞は存在しない。<sup>29</sup>それゆえ、この環境は名詞の修飾位置に生じる場合と同様、非束縛（自由）環境であると言える。

したがって、この環境では、5.1節で提案した非束縛環境における時制解釈原理（12）が働いていると仮定でき、過去分詞形の時制解釈のパターンとしては、図7で見た名詞修飾位置の場合と同じように3つ存在することになる。ま

ず、時制構造レベルでは「潜在的基準時に対する先行性」を表す（5.1節の図7 (i)）。分詞構文は主節状況の内容との関係でその接続詞的意味の解釈が決まってくるので、主節との関連性がかなり強い従属節と言える。それゆえ、過去分詞形の時制構造内の潜在的基準時は、時制解釈レベルでは無標の場合に主節動詞の出来事時と同定されることになる（5.1節の図7 (ii) ①）。

さらに次の段階において、当該過去分詞形が先行性解釈をもつのか同時性解釈をもつかが決まってくる。過去分詞形が表す状況そのものに焦点が当てられれば、事象構造内のその部分にのみ出来事時が対応し、そのまま先行性解釈を受ける（5.1節の図6 (i)）。ここでは基準時は主節動詞の出来事時と同定されるので、それが最終的な時間値として解釈されることになる（5.1節の図7 (ii) ②）。しかしながら、過去分詞形が表す状況の結果状態に焦点が当てられる場合、当該過去分詞形の出来事時は事象構造の中の結果状態部分に対応する時間帯までカバーするように解釈される（5.1節の図6 (ii)）。したがって、基準時が主節動詞の出来事時と同定されれば、その時点との同時性を当該過去分詞形の出来事時は表すことになる。この場合、出来事時の内部構造のうち、結果状態部分に当たる部分が基準時との同時性を表している（5.1節の図7 (ii) ③）。文脈から、過去分詞形の表す状況が「基準時よりも先行する時間帯」を暗示する場合は、このまま最終的な時間値として解釈されるが、「基準時における結果状態」のみが直接関係すると解釈される場合は、当該過去分詞形の出来事時の内部構造の中の結果状態に当たる部分のみが焦点化され、前景化される（5.1節の図7 (ii) ④）。すなわち、同時性解釈をもつ。これが最終的な時間値となる。

具体例で考察してみよう。(35a) では、主節の定形動詞 *looks* が表す出来事時の当てはまる時点が過去分詞形 *painted* の出来事時を測る基準時である（発話時が基準時であったとしてもどちらも同じ現在時なので、結果は同じである）。ここで、「白く塗ってあるので、大きく見える」の意味の場合、その結果状態（ペンキが塗られたままの白の状態）が基準時に当てはまっていることは明白である。それゆえ、*painted* の出来事時は事象構造の中の結果状態をカバーするように拡張すると解釈され、その結果、基準時との同時性を表すことになる。ここでは、「ペンキを塗る」という状況そのものは解釈上あまり重要ではないので、出来事時の内部構造の結果状態に対応する部分のみが前景化した解釈を受ける（5.1節の図7 (ii) ④）。(35b) も同様のプロセスを経て、過去分詞形 *upset* は基準時である *decided* の出来事時との同時性を表すと解釈され

る。ここでは、「うろたえさせる」という過去分詞状況も解釈に直接関与していると考えられるので、出来事時の内部構造の中の過去分詞状況と結果状態に対応する部分がともに前景化されたままである（5.1節の図7(ii)③）。

一方（36a）の過去分詞形 finished は、先行性解釈を受けることが可能である。「仕事が終わりに、家に帰った」という継起関係を述べている解釈の場合がそれで、特に結果状態が前景化する必要がないからである。したがって、この場合は当該過去分詞形の表す状況そのものだけが焦点化され前景化されるので、その出来事時は事象構造の中の過去分詞状況のみに対応する。それゆえ、この過去分詞形は先行性解釈を受けることになる（5.1節の図7(ii)②）。<sup>30</sup>

## 6. おわりに

本稿では、過去分詞形自体が表す時制構造は「先行性」であり、時制解釈の際にそれが生起する統語環境の特徴に応じて、先行性解釈になるのか、同時性解釈になるのか、どちらも許すのかを見てきた。時制解釈に関しては、名詞修飾位置と分詞構文に生じる過去分詞形は別の動詞（上位動詞）の直接的影響を受けない（どちらの解釈も許す）が、完了形や受動態、have 使役動詞補部や知覚動詞補部に生じる過去分詞形はそれらの上位動詞による制限を受け、先行性解釈もしくは同時性解釈のどちらかに定まっていくことが明らかになった。基本的に、先行性解釈は過去分詞形の出来事時が事象構造の中の過去分詞状況のみに対応するために生じてくるが、同時性解釈は事象構造の中の結果状態部分をも出来事時がカバーするように拡張すると解釈されるために生じてくるのであった。

本稿の考察結果は、図17のようにまとめられる。

統語環境	時制解釈環境	基準点（基準時）	基準時との関係
名詞修飾位置	非束縛環境	主動詞の出来事時または発話時	同時または先行
完了形	束縛環境	主動詞の出来事時	先行
受動態	束縛環境	主動詞の出来事時	同時
使役動詞補部	束縛環境	主動詞の出来事時	同時
知覚動詞補部	束縛環境	主動詞の出来事時	同時
分詞構文	非束縛環境	主節動詞の出来事時または発話時	同時または先行

図17：各統語環境の特徴と過去分詞形の時制解釈の関係

## 注

- 1 体系的な時制理論に基づいて過去分詞形の時間関係を分析した論考に中右(1994: § 14)があるが、複数の異なる統語環境にまたがる形では行っていない。
- 2 過去分詞形は規則変化の場合は-edで表され、不規則変化の場合もすべて-enで表されるわけではないが(例: beaten, kept, hit, spun, built), 本稿では、過去時制形態素(屈折辞)-edと区別するために、過去分詞形態素を-enで代表させる。
- 3 過去時制形態素は-edで代表させる。また, wasなどの不規則変化動詞の場合はbe + -edに因数分解できると仮定する。
- 4 話者の時制視点が話者の意識から切り離される場合, 前者は同じく「自己」を構成する要素である, 廣瀬(1997)やHirose(2002)が言うところの「客体的自己」と連動すると考えられる。客体的自己とは, 意識主体としての話者から切り離されて, 他者と同じ側におかれる自己のことである。話者の時制視点と意識が分離する場合ならびにそのメカニズムについては, 和田(2006)を参照されたい。
- 5 ここでは深く立ち入らないが, この時間値の中にはアスペクト情報も関わってくる。
- 6 (1b)のwasは, 主節時よりも出来事時が過去にくる解釈も表すことができるが, ここでは議論を単純にするために, この可能性を扱っていない。この解釈メカニズムについては, Wada(2001: Ch.8)を参照されたい。また, 発話時を基準時とした場合に, 論理的には起こりうる「主節時よりも当該出来事時が未来にくる」解釈がないのはなぜかという問いに対する答えについても, Wada(2001: Ch.8)を参照されたい。
- 7 NICE特性とは否定(Negation)・倒置(Inversion)・コード(Code)・強調(Emphasis)の各現象の総称であり, いわゆるDOの支えが起これると本動詞であり, 起こらないと助動詞と言われる(Huddleston 1976, Palmer 1987)。
  - (i) 否定(Negation)
    - a. I don't like it. /\*I liken't it.
    - b. You can't play tennis. /\*You don't can play tennis.
  - (ii) 倒置(Inversion)
    - a. Do you like it? /\*Like you it?
    - b. Can you play tennis? /\*Do you can play tennis?
  - (iii) コード(Code)
    - a. I want to ask you and {so does Bill/Bill does, too}.
    - b. I can go and {so can Bill/Bill can, too}.
  - (iv) 強調(Emphasis)
    - a. John DOES come tomorrow.
    - b. You CAN come tomorrow.
- 8 haveについては, 主にイギリス英語の場合で, 所有の意味を表す場合がここで対象となっている用法である。
- 9 Huddleston & Pullum(2002)は, 動詞句補部をとる動詞を連鎖動詞と呼び, 助動詞をこのタイプの本動詞として扱っている。

- 10 Wada (2001) が言う完了形の表す「結果状態 (Resultant State)」は、通例、この言葉の意味として用いられているものよりも広い概念を表す。すなわち、過去分詞の表す状況が直接引き起こす結果状態だけでなく、間接的に影響を与えた結果生じる状態も、この言葉の意味に含まれる。
- (i) I have visited Italy three times.  
例えば、(i)だと「イタリアを三度訪れる」ことによって、現在は「イタリアを良く知っている」という状態が間接的に引き起こされていると考えている。
- 11 この考え方は、Langacker (1991) などの認知文法の立場と基本的には同じである。
- 12 ただし、見た目は過去分詞形と同じ形 (例: exhausted, tired) をしていても、中身が形容詞化しているものは除く。
- 13 主動詞が終点 (end point) の実現までを内在的に要求するタイプの場合、すなわち、Vendler (1967) の言う「達成動詞 (accomplishment verb)」や「到達動詞 (achievement verb)」の場合には、主動詞自体が結果状態まで含意していて、結果句がその状態を詳述することになる。(i)はこの場合の具体例である。
- (i) John painted the wall red.  
このような場合 (主動詞が結果状態への言及を含意する場合) であっても、「結果状態の当てはまる時間よりも時間的に前に生じる段階」に言及することができるのは主動詞のみであり、結果句はあくまでも「結果状態の当てはまる時間」にしか言及できないという点に注意されたい。
- 14 ここで言う「焦点を当てる」という操作は、機能的には、認知言語学で言うところの「プロファイルする」という操作に相当する。
- 15 受動態の場合、V1には get もくることができるが、get 受動態は本稿では扱わない。こと過去分詞形の時制解釈に関しては、be-受動態と同様の分析が当てはまるからである (Carter & McCarthy 1999)。
- 16 本稿では、論点を明確にするために、以下のような完了形は扱わない。
- (i) a. John will have arrived before Mary leaves. (未来完了形)  
b. Nancy may have arrived yesterday. (法助動詞 + 完了形)  
c. Tom is believed to have left yesterday. (完了不定詞)  
d. Having finished the homework, Naomi went out for shopping.  
(完了分詞構文)
- これらの統語環境に現れる過去分詞形には、他に議論すべき文法事項が含まれていて、議論がさらに複雑になるからである。
- 17 ここで注意されたいのは、ここでの拡張のメカニズムは5.1節の図7(ii)③で見たような、過去分詞形の出来事時が事象構造内の過去分詞状況とその結果状態に対応する時間帯をカバーする場合とは、途中のプロセスが異なるという点である。この「継続」用法の場合は、あくまでも出来事時は事象構造内の過去分詞状況にしか対応していない。
- 18 Langacker (1991) は、受身の be はコンピュータの be と共通する部分をもつ一方で、後者は未完結的 (imperfective) であるのに対し、前者は完結的 (perfective) であると述べている。彼の分析によると、過去分詞は非時間的 (atemporal) でそれ自体は一切時間関係を表さず、グラウンディング機能をもつ受身の be と合

体することではじめて任意の時点における過去分詞の状況の完結が表され、それによって生じた結果状態が受動態の意味となる。しかしながら、本文の(5)の例が示すように、過去分詞自体(受身の *be* がない過去分詞)が時の副詞に修飾されることもあるので、時間関係を表すこともある。したがって、彼の分析ではこういった場合を扱えない。一方、本稿の分析では過去分詞形自体に時間関係を表す部位(すなわち、時制構造)を認めるので、時間関係を表す副詞との共起性は問題とならない。

- 19 受動態になれる状況は、原則として、動的な (dynamic) 状況もしくは動作主によって制御可能な (controlled by the agent) 状況である。したがって、通例、以下のような場合は受動態を取れない (cf. Declerck 1991: 200–201)。
- (i) 動作主によって制御できない状況：
    - a. The country has changed its appearance. (Declerck 1991: 201)
    - b. \*The appearance has been changed by the country.
  - (ii) 自然に生ずる状況：
    - a. John received an anonymous letter yesterday. (Declerck 1991: 201)
    - b. \*An anonymous letter was received by John yesterday.
  - (iii) 動詞が、主に、関係概念や状態を表すタイプ：
    - a. The auditorium holds eight hundred people. (Declerck 1991: 201)
    - b. \*Eight hundred people are held by the auditorium.
  - (iv) 一部の認知動詞 (cognition verb)：
    - a. He likes you. (Declerck 1991: 201)
    - b. \*You are liked by him.
- 20 一般に、以下の基準を満たすものが分詞的形容詞であると言われている (cf. Declerck 1991: Ch.6, Ch.13; Huddleston & Pullum 2002: Ch.3, Ch.10.1.3)。
- (i) *seem, look, appear, remain* などの連鎖動詞の後にくる場合：
    - a. The picture seemed excellent/distorted.
    - b. \*The boss seemed considered guilty of bias.  
(Huddleston & Pullum 2002: 79)
  - (ii) *very* や *too* などの程度副詞による修飾を受ける場合：
    - a. He was very frightened./He was too frightened to move.
    - b. \*The plants were {very/too} wanted by the gardner.  
(Huddleston & Pullum 2002: 79)
  - (iii) *by* 句以外の補部としての前置詞句が従う場合：
    - a. I was annoyed by the things she said to me.
    - b. I'm annoyed with her behaviour. (Declerck 1991: 452)
  - (iv) *so* によって代用される場合：
 

He isn't really satisfied. He just seems so because he doesn't complain.  
(Declerck 1991: 202)
- 21 一般に、使役の *make* は「NP+過去分詞」の型を補部にとりにくいと言われている (cf. Gilquin 2003: 128)。
- (i)
    - a. I {had/\*made} my hair cut.
    - b. I {had/\*made} the ice crushed by the cement block.

c. I {had/\*made} Mary examined by the doctor.

(稲田 1989 : 74)

しかし、全くこの構文が存在しないわけではない。

(ii) a. The candidate made his power felt. (Baron 1973: 308)

b. I couldn't make myself understood in English. (稲田 1989 : 74)

これに対して、使役の get は使役の have と同様、ふつうに「NP+過去分詞」を補部にとる。

(iii) a. ... but he always gets the job done. (Gilquin 2003: 133)

b. The candidate got his name cleared. (Baron 1973: 308)

make 使役, have 使役, get 使役の相違点については、これまで多くの文献が様々な角度から分析してきている (Baron 1973, Gilquin 2003, 稲田 1989, Ritter & Rosen 1993, Wierzbicka 1988)。本稿では、その中でも過去分詞を補部に従える頻度が一番高いという点から、使役の have をとり上げることにする。

- 22 このような構文に生じる have を便宜上使役の have と呼ぶが、この構文が受動的な解釈を受けることもありうる。いわゆる迷惑受身と呼ばれる解釈が可能な場合である。この解釈を受ける典型例は、過去分詞形が主語にとってよくない状況を表す場合である。

(i) I had my wallet stolen. (Huddleston & Pullum 2002: 1245)

こういった事実を基に、Ritter & Rosen (1993) は、have は語彙的には無指定で、文脈から「have + NP+過去分詞」の型が様々な解釈 (使役や迷惑受身など) を受けると述べている。

- 23 一般には、make の場合と違って、have の補部に受身がくる場合は be は削除されると言われるが、(29) のように be が現れる場合もある (cf. Gilquin 2003: 136)。この補部に be が現れる場合に加え、注21でも見たように、make も have も「NP+過去分詞」を補部にとれることから、後者の場合は使役の make も have もともに小節を補部にとると分析する論考がある (cf. 稲田 1989 : 75)。一方、have の補部には受身の be が現れにくいことや虚辞の it や there が現れないといった事実 (以下の (i) と (ii) を参照) を基にして、使役の make の補部は have とは異なる節点 (つまり、S (=IP) ) をもつとする分析もある (Ritter & Rosen 1993)。

(i) a. \*John had it seem likely that Bill had died.

b. John made it seem likely that Bill had died.

(Ritter & Rosen 1993: 541)

(ii) a. \*John had there be computers available for all the students.

b. John made there be computers available for all the students.

(Ritter & Rosen 1993: 541)

本稿では直接 make 使役をとり上げていないこともあり、その補部の節点が have 使役の場合と同じなのか異なるのかについては、ペンディングとしたい。

- 24 これに対して、すべての知覚動詞補部に統一的な構造を与えることはできないとする分析に、Declerck (1982) がある。本稿の分析は、知覚動詞補部の構造はすべて共通しているという立場に立っている。

- 25 知覚動詞補部全体が知覚動詞の目的語を表していること、すなわち、小節を形



成していることを示す他の根拠として、Kirsner & Thompson (1976:209-211) は以下の例を挙げている。

- (i) We saw the invisible nerve gas kill all the sheep (but of course we didn't actually see the invisible nerve gas itself).
- (ii) a. I have seen faith accomplish miracles.  
b. \*I have seen faith.
- (iii) a. Rover heard it thundering.  
b. We saw there arise over the meadow a blue haze.

(i)は補部全体を知覚しているとしか感じられないことを、(ii)は直接目的語だけでは非文になることを、(iii)は直接目的語に虚辞の *it* や *there* を取ることができていることを示している。それゆえ、これらの例は知覚動詞全体が1つのユニットを成していることを示している。

(iii)に関して、GB理論の文献では、よく知覚動詞補文に *there* はこれないとしている。

- (iv) a. \*We saw there arrive three girls. (Arimoto 1991: 136)  
b. \*I saw there be (so) many mistakes.

この点については、(iiib)は純粋な動作や状態を表すのではなく、いわゆる心的走査 (*mental scan*) を受けた結果、心の中で状態変化のプロセスを追っていった後の状態 (いわば、比喩的な結果状態) を表していることが原因かもしれない。この点の解明については、今後の調査にゆだねたい。

- 26 以下のような例は、一見知覚の同時性の制約に対する反例に思えるかもしれない。副詞 *just now* は、通例過去形と共起するからである。

- (i) My char heard it said just now. (Declerck 1991: 460)

しかし、この場合の *just now* は主動詞 *heard* の表す出来事時を指示しているので、反例ではない。過去分詞 *said* の表す時点はあくまでも *heard* の表す時点と同時だからである。

- 27 本稿の分析の基盤となる時制モデルは助動詞・本動詞説を採用しているので、この考えでは (34) の非文法性を説明できないという反論があるかもしれない。例えば、(34a) だと、完了の *have* は結果状態を表し、知覚動詞 *saw* の出来事時において当てはまっていると考えられるので、知覚の同時性の制約を守っていることになり文法的な文になると予測するから、という具合にである。しかし、ここで注意されたいのは、(32) のような例と異なって、(34) では知覚時に直接当てはまっているのは *have* や *(be)going to* が表すスキーマティックな状況であり、後続する語彙動詞の中身に応じてどのような状況を表すかが変わってくる、いわば変項的な状況であるという点である。それゆえ、(34) では補部の表す具体的な中身のある状況は知覚時と直接関係しておらず、その結果、知覚する時点と知覚される (できる) 対象の出来事時は同時間帯を占めていないと言えるので、「知覚の同時性の制約」の違反になると説明できる。

- 28 過去分詞形の分詞構文の中には、受動の意味ではなく完了の意味をもつものもある (cf. Huddleston & Pullum 2002: 1429)。(ib) がその例である。

- (i) a. Considered by many overqualified for the post, she withdrew her application.

b. Now fallen on hard times, he looked a good deal older.

(Huddleston & Pullum 2002: 1429)

この場合の過去分詞形の時制解釈のメカニズムは、基本的に完了形の場合と同じく「先行性」を表すので、本稿の分析では問題とならない。

- 29 本稿では分詞構文節全体の節点をSとしているが、SCであっても議論の本質には影響しない。どちらの場合にも、主節のSが分詞構文中の過去分詞形の時制解釈の障壁となるからである。また、(35)の主語のない分詞構文内の意味上の主語は生成文法で言うところのPROに対応し、これが主節主語によって制御(control)されているために主節主語と同一指示になると考える。
- 30 この環境では、「結果状態」を表す動詞のhaveが存在していないため、構文としては「結果状態」を表す明示的要素が存在しない。それゆえ、過去分詞の語彙特性に応じて、「結果状態」が目に見えて(あるいは、具体的に)存在している場合はその結果状態が前景化するが、そうでない場合は過去分詞の表す状況のみが前景化する。

### 参考文献

- Akmajian, Adrian, Susan M. Steele, and Thomas Wasow (1979) "The Category AUX in Universal Grammar." *Linguistic Inquiry* 10, 1-64.
- Arimoto, Masatake (1991) "There-Insertion and the Structure of Sentences/Small Clauses." *Topics in Small Clauses*, ed. by Heizo Nakajima and Shigeo Tonoike, 107-146, Kurosio Publishers, Tokyo.
- Baron, Naomi (1973) "The Structure of English Causatives." *Lingua* 33, 299-342.
- Bolinger, Dwight (1967) "Adjectives in English: Attribution and Predication." *Lingua* 18, 1-34.
- Carrier, Jill and Janet H. Randall (1992) "The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives." *Linguistic Inquiry* 23, 173-234.
- Carter, Ronald and Michael McCarthy (1999) "The English Get-Passives in Spoken Discourse: Description and Implications for an Interpersonal Grammar." *English Language and Linguistics* 3, 41-58.
- Cowper, Elizabeth (1989) "Perfective -En IS Passive -En." *WCCFL* 8, 85-93.
- Declerck, Renaat (1982) "The Triple Origin of Participial Perception Verb Complements." *Linguistic Analysis* 10, 1-26.
- Declerck, Renaat (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Kaitakusha, Tokyo.
- Duffley, Patrick (1992) *The English Infinitive*, Longman, London.
- Gee, James P. (1977) "Comments on Akmajian (1977)." *Formal Syntax*, ed. by Peter Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian, 461-481, Academic Press, New York.
- Gilquin, Gaëtanelle (2003) "Causative Get and Have: So Close, So Different." *Journal of English Linguistics* 31, 125-148.
- 早瀬尚子 (2002) 『英語構文のカテゴリー形成』勁草書房。

- Hayashi, Ryujiro (1991) "On the Constituency of Small Clauses." *Topics in Small Clauses*, ed. by Heizo Nakajima and Shigeo Tonoike, 11-25, Kurocio Publishers, Tokyo.
- 廣瀬幸生 (1997) 「人を表すことばと照応」中右実 (編) 『指示と照応と否定』 1-89 頁, 研究社.
- Hirose, Yukio (2002) "Viewpoint and the Nature of the Japanese Reflexive *Zibun*." *Cognitive Linguistics* 13, 357-401.
- Hirtle, Walter H. (1969) "-Ed Adjectives like 'Verandahed' and 'Blue-eyed'." *Journal of Linguistics* 6, 19-36.
- Huddleston, Rodney (1974) "Further Remarks on the Analysis of Auxiliaries as Main Verbs." *Foundations of Language* 11, 215-229.
- Huddleston, Rodney (1976) "Some Theoretical Issues in the Description of the English Verb." *Lingua* 40, 331-383.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 稲田俊明 (1989) 『補文の構造』大修館書店.
- Kirsner, Robert and Sandra Thompson (1976) "The Role of Pragmatic Inference in Semantics: A Study of Sensory Verb Complements in English." *Glossa* 10, 200-240.
- Lakoff, George (1996) "Sorry, I'm Not Myself Today: The Metaphor System for Conceptualizing the Self." *Spaces, Worlds, and Grammar*, ed. by Gilles Fauconnier and Eve Sweetser, 91-123, The University of Chicago Press, Chicago and London.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*, Basic Books, New York.
- Langacker, Ronald (1991) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Mouton de Gruyter, Berlin and New York.
- Langacker, Ronald (1995) "Raising and Transparency." *Language* 71, 1-62.
- 中右 実 (1980) 「テンス, アスペクトの比較」國廣哲弥 (編) 『日英語比較講座第 2 卷: 文法』 101 - 155 頁, 大修館書店.
- 中右 実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店.
- Palmer, Frank R. (1987) *The English Verb*, Second Edition, Longman, London.
- Pustejovsky, James (1991) "The Syntax of Event Structure." *Lexical & Conceptual Semantics*, ed. by Beth Levin and Steven Pinker, 47-81, Blackwell, Cambridge, MA.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Ritter, Elizabeth and Sara Thomas Rosen (1993) "Deriving Causation." *Natural Language and Linguistic Theory* 11, 519-555.
- Ross, John Robert (1969) "Auxiliaries as Main Verbs." *Studies in Philosophical Linguistics*, ed. by William Todd, 77-102, Evanston, Illinois.
- Simpson, Jane (1983) "Resultatives." *Papers in Lexical-Functional Grammar*, ed. by Lori Levin, Malka Rappaport, and Annie Zaenen, 143-157, Indiana

- University Linguistics Club, Bloomington.
- Smith, Carlota (1983) "A Theory of Aspectual Choice." *Language* 59, 479-501.
- Swan, Michael (1995) *Practical English Usage, New Edition*, Oxford University Press, Oxford.
- 高橋 潔 (1999) 「知覚動詞と非定形補文との意味的整合性」 稲田俊明, 他 (編) 『言語研究の潮流』 127-144頁, 開拓社.
- 谷口一美 (2004) 「-ed に関する覚え書」 『言葉のからくり - 河上誓作教授退官記念論文集 -』 499-511頁, 英宝社.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press, Ithaca.
- Wada, Naoaki (2001) *Interpreting English Tenses: A Compositional Approach*, Kaitakusha, Tokyo.
- 和田尚明 (2006) 「英語の3人称小説における時制解釈」 『時制とその周辺領域の統語的・意味的研究 (平成15年度~平成17年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 研究成果報告書)』 89-134頁, 山口大学.
- Wierzbicka, Anna (1988) *The Semantics of Grammar*, John Benjamins, Amsterdam.